

東日本大震災から五年。子どもたちとのパートナーシップでたどった歳月をふりかえると、震災一週間後から子どもたちには失禁、暴力、暴言などの行動が見受けられました。大人たちは時にはやさしく正し、寄り添い、見守りしました。パーティションなどで「囲わない」運営をした石巻

高校(宮城県石巻市)の避難

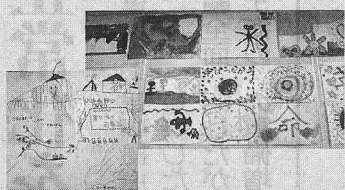
東北復興日記



▶▶ 183

まだまだ

いしのまき寺子屋での表現



東日本大震災圏域創生
NPOセンター

(いしのまき寺子屋) 事務局長
太田美智子さん



そっと見守った子どももの行動

所は、子どもたちの心を多くの視線でサポートし、虐待の防止策にもなりました。仮設住宅に移った子どもたちにとって、避難所は下校後に帰ってくる実家のような存在にもなりました。

震災一年目はスクールバスもなく、親の送り迎えで通学。学童保育も始まっていませんでした。二〇一一年七月ごろ、避難所で親の帰りを待っていた小学六年生の児童は、避難所がなくなるとの報道を聞き「おれ、どこに帰ればいいんだ!」。この一言を聞いて、いしのまき寺子屋

は、避難所で終了せず、子どもたちの新たな「居場所」を開設して活動を続けることにしたのでした。

避難所が解散した翌日の同年十月十一日、石巻市山下町に開所。そこは、母の仕事帰りを学校の軒下で待ち続ける子どもや、仕事をしたいが預ける所がなく求職できない母親ら、石巻高校避難所にいた人たちの居場所となりました。

当時、市内には公園や野外の遊び場がまだなく、室内活動が中心となりました。絵を描いたり、ウッドクラフト、段ボールハウスづくりなど、

さまざまな創作活動^①写真^②が子どもたちの不安やストレスを解消していきました。月に一回は里山での野外体験活動も行いました。

子どもたちの作品やコメントなどから見えてきたのは、屋内や屋外で自由に表現する機会と場面を多く持つことで、心のダメージとも自然と向き合い、乗り越えていたといふことでした。大人の役割は、遊ぶ場や学ぶ場の環境整備に徹し、子どもたちの行動には口出しや手出しをせず、ながままとそっと見守ることでした。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。